

萬葉に於て日本の感情を見る (九)

東京女子高等師範學校教授

石井 庄司

七 稽古照今

「丈夫の弓する振り起し射つる矢を後見む人は語り繼ぐがね」を詠んだ萬葉の武人たちは、後世への顧慮、未來に傳はる自己の名に對して非常な注意を拂つて居ります。萬葉人は將來のこゝに就いて異常な關心を持つてゐたといへます。

しかしそれと同時に、萬葉人はまた自己の祖先をふりかへり、いはゆる報本反始といふ考も強かつたのであります。いつも自己及び國家の原初に思を寄せるといふのが萬葉人の特色であつたを考へられます。中でも柿本人麿は最も強くさういふ考へ方をしてゐた人のやうであります。

萬葉集卷一の初の方に、人麿が近江の荒れたる都を過ぎて詠んだ長歌があります。此の歌は、持統天皇の御代の歌で、人麿が天智天皇の都せられた近江國の大津宮の跡に就いて實際に見たところを述べたものであります。ところが人麿は、まづ初めに「玉だすき畝火の山の檣原のひじりの

御代ゆ……」といった具合に、畏くも神武天皇の御代のこゝから説き起して、代々の天皇が大和に都せられたことを歌ひます。それであるのを天智天皇の御代になつて、都をささなみの大津の宮にお遷しになつた云々を申して居ります。天智天皇の御代の事績を述べるのに、神武天皇の御代の事から説き起すのであります。

また人麿が日並皇子の御事を歌ふに及んでは「天地の初めの時のひさかたの天の河原に、八百萬千萬神の神集ひ集ひいまして、神はかりはかりし時に」をいつて、肇國のこゝ、また天孫降臨のこゝを詠んで居ります。即ち持統天皇の御代の事を歌ふのに、神代の昔のこゝから説き起すといふ遠大なやり方であります。人麿の長歌には、特にこの懐古の言葉が多いのであります。以て、人麿といふ人は、如何なる人であつたかを窺ふことができるのであります。また推しては萬葉時代の人々の一般の物の考へ方といふことも分るのであります。

持統天皇の和銅五年には、太安萬侶によつて古事記三巻が撰修奏上されました。その奏上文の中に「古を稽へて以て風猷を既に頼れたるに繩し、今を照して以て典教を絶えむとするに補はずいふことなし」とあり「稽古照今」といふことが重要な事項となつて居ります。青少年學徒に賜はりました勅語にも「古今の史實に稽へ」と仰せられ「稽古」といふことが示されてゐるのであります。人麿が何か物を言はうとするときに、さうしても遠い先祖の時代の事から説き起して來なければならぬといふのは、これ「稽古」であります。そして「今を照す」といふものなるのであります。

かういふ例證として、私は、萬葉集卷二十にある大伴家持の「族に喩す歌」といふのを味はつてみたいと思ひます。

これは長歌でありますが、最初に「ひさかたの天の戸開き高千穂の嶽に天降りし皇祖の神の御代より」といふ言葉があり、天孫瓊々杵尊が天の岩戸を開いて日向の高千穂の嶽に御降りになつたところから説き出して居ります。大伴氏の始祖である天の押日命は手には弓矢を持ち久米の兵士等先鋒として、天孫の御伴をして來たのであります。そして種々の功績を擧げ、服従しない者を和らげ、不逞の者どもを掃蕩してきました。かくて天の押日命の子孫たちは、大和の橿原宮にお仕へし、神武天皇の爲に忠勤を勵みました。なほ御歴代の天皇に赤心を盡くしてきたのであります。わ

が大伴家は、そのやうに長い歴史を持つた名家であるぞ一族を勵ますのであります。「子孫のいや繼ぎ繼ぎに見る人の語り繼ぎて、聞く人の鑒にせむを、あたらしき清きその名ぞ、おほろかに心思ひて虚言も祖の名斷つな、大伴の氏に名に負へる健男の伴」と言つて、この長い歌の結にしています。なほ反歌には、

數島の倭の國に明らけき名に負ふ伴の緒ころつさめよ
 劔刀いよよ研ぐべしいにしへの清けく負ひて來にしそ
 の名ぞ

といふのがあります。前の歌は、數島の日本の國に於て、特によく人に知られてゐるよい名を保つてきた一族の人々よ、心につさめてしつかりさやらうではないかといふ意味。「數島の倭の國に明らけき名に負ふ……」とは、何といふ自恃の念に勝れた歌でありませう。これも、むかしからの歴史といふものをふりかへつてみたときの信念であります。先祖に對する大いなる信頼であります。

又、次の歌は、わが大伴氏の一族たるものは、大いに奮勵して、名聲を磨き、光輝を發揚せねばならぬ。古來潔く負ひ來つたそのありがたい名であるぞいふ意であります。こゝでも「いにしへの清けく負ひて」といふところが光つてゐます。尊い歴史のたまものであり、報本反始、崇祖といふ氣持であります。

なほ家持の先祖を想ふ心は、萬葉集卷十八にある陸奥國より金を出せる詔書を賀ぐ歌の中にもよく現はれて居ります。この歌も初は「葦原の瑞穂の國を天降りしらしめしける天皇の神の命の御代重ねて天の日嗣としら来る君の御代御代」さいふやうに、高天原から天降つて我が日本の國を御統治遊された天孫瓊々杵尊以來、御代を重ね、皇位にあつて次々に御支配なされた御歴代の天皇云々歌つて居ります。そして今、陛下が大佛鑄造さいふ善業を遊ばさるゝに就き、黄金の不足のころへ陸奥國から黄金が獻上された、その慶びを言葉を重ねてこゝほぎます。それにつけても我が大伴一族の遠い祖先たちは、その名をば大來目主さいひひ、朝廷に仕へてゐた武官の家柄でありました。「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大皇の邊にこそ死なめ、顧みはせじ」さいふ言立を持ち、大丈夫たる立派な名を遠い昔から現在に至るまで、傳へてきた先祖のその子孫である我等であります。大伴氏と佐伯氏は、先祖の立てた誓言にある通り、子孫たちは先祖の名を絶やさず、大君に仕へ奉るものだと言ひ繼いできた格別の官職でありますさいつて、昔の誓言を述べます。その原文は

「人の子は祖の名絶たず、大君にまつろふもの」

さいふのであります。祖先を崇めるこゝは祖先の顯揚になります。かういふ立派な教が家持によつて傳へられてきた

のであります。

かういふ譯で、吾等子孫たるものは梓弓を手に持ち、劔太刀を腰に帶びて、朝に夕に朝廷を守り、宮門を守るものとして、我等の外にはまたその人はあるまいと、大君の此の度の詔のありがたさを承れば、一層貴く感じ、愈々家の教を押し立てて、益々奉公の決心を固める次第でありますさいふやうな意味で、歌を結んで居ります。

大伴の遠つ神祖の奥津城はしるく標立て人の知るべくは右長歌の末に添へられた反歌の中の一首であります。「我等大伴氏の遠い先祖のお墓は、はつきり標を立てよ、世の人々がよくわかるやうに」さいふのが一首の意であります。「大伴の遠つ神祖」三天の押日命や道臣命のこゝをさしてゐるのであります。お墓をしつかり守るさいふこゝは、先祖の祭祀を絶やさぬさいふこゝは、結局その一族の繁榮繼續を示すものであります。實にはつきり崇祖の思想を表現した作であります。

家持が先祖を思ひ、先祖傳來の家名を傷つけないやうに努めたこゝは非常なものであります。そのやうに祖先を思ふさいふ家持の氣持は、他の場合にも出て居ります。

それは聖武天皇が吉野離宮に行幸遊さるゝ時に詠んだ作の反歌であります。

いにしへを思はすらしもわご大君吉野の宮をあり通ひめ

す

わが天皇が常に吉野離宮に行幸あつて、山川の勝景を御覽遊ばされるさいふのも、實はいにしへに於て、此の離宮を創建遊ばされたその當時のここをなつかしくお偲びなさるここを拜察いたしますさいふのであります。吉野離宮は遠く應神天皇の御代から歴史にも出て居り、特に持統天皇のごときは御一代の間に二十數同行幸になつて居るのであります。そのやうに由緒の深い歴史をかへりみ給ふものかミ推察申し上げて居るのでありますが、全く家持のものの考へ方をよく示してゐるのであります。

この長歌にも、もう一首の反歌があります。

もののふの八十氏人も吉野河絶ゆるこさなく仕へつつ見む

「もののふの八十氏人」は多くの官人達といふことでもあります。それらの人達が吉野河の絶えるこさのないと同じやうに何時までも天皇にお仕へ申し上げて、吉野のよい景色を見るであらうとの意で、前の歌において、遠き古に思ひをやつたと同時に、また遠き未來に心をかけるのであります。こゝに尊いところがあります。懷古は、單なる古を懷しみ、古に抱泥することではなくて、家持のこの歌のやうに遠き過去に思を寄せることは、やがて遙かなる未來を望むこととなるのでありまして、こゝに本當の「稽古照今」さいふこ

さがあるのだと思ひます。

家持が越中守から都に上つてきましたとき左大臣橘諸兄を壽ぐために作つた歌があります。いささか儀禮的のものでありますが、家持の心持が同はれるやうに思ひます。

その歌さいふのは次のやうなものであります。

いにしへに君の三代經て仕へけり吾が^み大主は七世申さねむかし三代の天皇に歴任したものがあります。さうかなた様は七代までも永くお仕へなさいまして、政治に關係なさいますやうにさいふ意味であります。「三代」ミ「七世」が一つの緩になつた歌で、大部技巧さいふこさが眼につくのであります。稽古照今の具體的な卑近な例證さも考へられるのであります。

人麿、家持を多く例證さしましたが、以上のやうな「稽古照今」さいふ考へ方は、萬葉人に共通のものさ考へてよいと思ひます。